



「おがせ池龍女ものがたり」の紙芝居を大型スクリーンで上演
寺野久美子さんが語り、大谷泰史さんがエレクトーン伴奏で雰囲気演出



鵜沼中吹奏楽部の演奏。観客の手振りを誘うパフォーマンスも



各務小郷土芸能クラブが、地元の人から教わった「村国ばやし」を披露



外山貴一さんが「おがせ音頭」を歌い、揃いの手拭いを掛けて踊る皆さん

十一月三日(土)、各務小体育館で「第五回村国の郷ふれあいの集い」が開催されました。今回は小学校の全児童も参加し、来場した地域の皆さんと一緒に見ごたえあるステージを楽しみました。

「第五回 村国の郷ふれあいの集い」

地区社協
だより

村国の郷

第48号
編集・発行
各務地区社会福祉協議会

社協会費が
使われています



会場が笑いでいっぱいになった
経大亭勝笑さんのトーク笑

行事の様子は新聞報道されたほか、CCネットスベシャルで二月二十日から一週間、毎日放映されました。これからも、多くの人々にふれあいの場として親しんでいただけるよう願っています。

+

+

地域ふれあい広場

皆で公民館に集い、地域の歴史を題材にした紙芝居を見たり、ゲームをしたりして交流する恒例の行事。今年度の紙芝居は「おがせ池龍宮城伝説」です。新しく始まった紙コップ工作ではペンギンを作ります。ゴムを使って自力で動くようにするので人気があります。ビンゴゲームは景品がちよっぴり豪華になって興奮度もアップしています。

各務地区で年間10回の開催ですが、開催地域への案内は事前に回覧板などで行っています。是非参加しましょう。



紙コップ工作

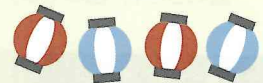
おがせ音頭をPR



7月某日、「おがせ音頭」の歌と踊りの制作関係者が市役所を訪ね、浅野市長に完成報告をしました。この歌は当会が取り組む事業「歴史で広がる郷土の福祉」の一環として制作されたもの。歌詞は、桜、睡蓮、紅葉、雪といった池の四季を詠うなかで、「神の遣い」「染まる神秘」など伝説を思わせる言葉も並びます。当会の長縄会長が各務幸作のペンネームで作詞作曲し、地元の歌手・外山貴一さんが歌っています。また、踊りの振り付けは貴山観柳さんが担当しました。

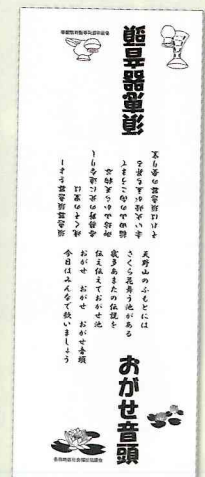
「男依音頭」「須恵器音頭」とともに、各務にゆかりの三音頭として広くアピールしていきます。なお、この歌のDVDはユーチューブへアップしていますのでご覧ください。

おがせ池夏祭りで三音頭を踊る



7月21日に開催されたおがせ池夏祭り。花火が始まる前の日没時間に、本部席前の広場で各務にゆかりの三音頭を披露しました。ステージ上では外山貴一さんが、完成したばかりの「おがせ音頭」と昨年発表された「須恵器音頭」を熱唱。

両音頭の歌詞入りのオリジナル手拭いが配られ、首にかけた100名ほどが輪を作りました。浴衣姿で祭りに訪れた外人さんも、見よう見まねで輪に加わっていました。



オリジナル手拭い

講演会・研修会の開催



★第1回近隣ケア研修会 30.04.21
「介護保険」や「地域包括ケアシステム」等についての研修を行いました。(写真)

★地域コミュニティ会議
(第1回福祉講演会に代えて) 30.06.16
再来年スタートする第4期地域福祉計画策定のための意見交換をしました。

★第2回福祉講演会 30.10.19
認知症患者にも関係がある「行方不明者の検索」等の講演をお聞きしました。

★第3回福祉講演会 31.01.19
「成年後見制度」と「老後の土地・家の扱い」について、2人の講師から学びました。



高齢者 ふれあい訪問

9月の敬老の日に合わせて、今年も80歳以上の方々550人を民生・児童委員や近隣ケアが訪問し、ささやかな記念品をお渡ししました。普段はなかなか顔を合わせることが無いので話し込む場面もありました。



「表彰」



★11月に行われた第52回各務原市社会福祉大会において、近隣ケアグループ船山東が「ボランティア功労表彰」を受けました。また、当会の前会長・澤井安直氏(故人)に対し、地域福祉感謝状が贈られました。

★ボランティアハウス庵が、自治会と連携し「お出かけサロン」で高齢者等の移動支援をしたり、ふれあいバス・タクシーなど公共交通の利用促進に努めたことから、地域における共生社会と心のバリアフリーの醸成に貢献したとして、10月に中部運輸局から表彰をされました。(写真)

各務の歴史 連載④

「村国の里と村国連男依の年齢」

文・上村 南耀

大海人皇子は、壬申の乱(672年)を経て、それまでの大王や天皇を凌ぐ絶対的な君主天武天皇になりました。この時、功臣の一人として大活躍したのが村国連男依です。男依の名は『日本書紀』に登場しますが、年齢や村国連氏のはっきりした出自については不詳のままです。

大和朝廷成立以前の大小のクニの王の末裔(国造)や有力豪族(伴造)は、支配地を大王家に献上した後も自ら管理していました。大王家が配下を使って直接開発し管理した所(息もありません)これらの地域を基に評が編成され、国評里の行政区が置かれました。

美濃国の国名は三野、御野を経て美濃へ、各務郡の郡名は大宝律令制の下で各牟評から各務郡へと変わったことが知られます。

居住地である幾つかの里(後に郷)は、五十戸里を基本に編成されました。この戸は現代のそれとは異なり、総じて大家族制に近いものです。

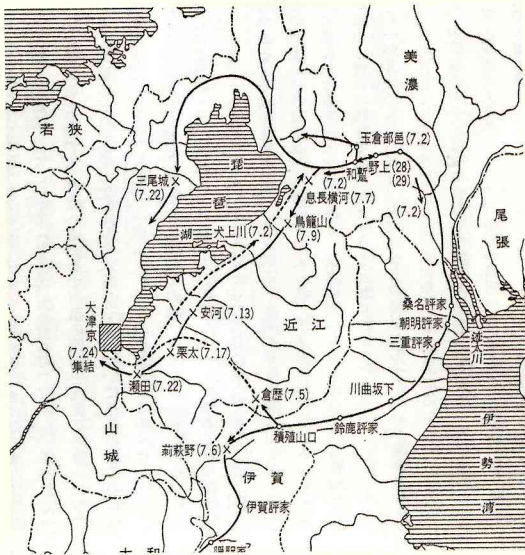
里は、比較的狭い範囲に戸が多く寄り集まった所もあれば、広い範囲に数戸がまばらに点在する所もありました。集まりごとに戸頭が置かれ、それを

介して里(郷)を支配したのが里長です。村国里の里長は、おそらく村国氏だろうと思われれます。

六九九年当時、各務評には汗奴麻里があり、七〇二年には各牟郡中里の置かれていたことが知られています。

それに先立つ壬申の乱(672年)当時、各美評あるいは各牟評に汗奴麻里があった可能性は大きいにあります。けれども、村国里があったかどうかまでは断言できません。

行政区の評は大宝令により郡に呼び名が変わります。男依が亡くなった天武天皇五(676)年の贈位前後の関係から、壬申の乱(672年)以後に



大海人皇子軍の進軍図

各美評あるいは各牟評に村国里が新しく設置された可能性は十分に考えられます。

『和名類聚抄』(930年代成立)では各務郡は村国、大棟、各務、那珂、芥見、三井、駅家の七郷に分かれています。この時までに汗奴麻里の名は消え、駅家郷と村国郷の範囲に再編成されたようです。

さて、男依本人の年齢は分かっています。けれども天智天皇(626-671年)の崩御時の御年齢と、それまで大皇弟であった天武天皇の崩御(生年不詳-686年)などを考慮すれば、天武天皇は恐らく五十代後半に身罷られたと考えられます。

男依(生年不詳-676年)は天武天皇より十一年前に亡くなりました。大海人皇子(天武天皇)との強い信頼関係を考慮すれば、舎人とはいえず、いわば現代風にいうと、学友のような立場ではなかったかと想像されます。この見方が正しいければ、男依は幼少よりの近習であり、大海人皇子と同年か、もしくは少く年上ではなかったかと推定できます。

そうであれば、四十代後半で亡くなった可能性があり、乱当時の男依は四十歳前半の男盛りだったといえます。正面攻撃軍の筆頭将軍に選抜されても決して違和感のない年齢であり、人間関係です。